

いつも一緒 富山のペットたち

新緑がまぶしく、お散歩にもいい季節になりました。芝生の上でワンちゃんたちがゴロンとおおむけになっているとき、胸からおなかにかけてしこりがないか触ってみましょう。乳腺にしこりがあれば乳腺腫瘍の可能性があります。

この記事を読んでいただきたいワンちゃん、飼い主さんの中で、動物病院で乳腺腫瘍と診断された経験をもちの人もいらつしやうと思います。メスのワンちゃんに発生する腫瘍の中で乳腺腫瘍は最も多く見られます。一般的に胸部から脚の付け根までの乳腺に1個から複数個のしこりができ、良性50%、悪性50%と言われていています。悪性でも外科手術などにより完治できる可能性は十分あります。



あい動物クリニック院長
(富山市小杉)

余命1カ月未満

今回お話ししたいのは、特別な乳腺腫瘍です。通常のしこりを作るタイプとは全く違う経過や症状が現れる乳腺腫瘍で「炎症性乳がん」という病気があります。幸い、発生率はワンちゃんの乳腺腫瘍の中の数%と非常

炎症性乳がん

小杉 和伸

に低いのですが、論文では診断後の平均生存日数(炎症性乳がん)と診断されてからごくくなるまでの日数の平均値は25日。なんと余命1カ月もないのです。それくらい恐ろしい病気です。

炎症性乳がんは、全体もしくは部分的に、乳腺自体が棒状や板状に硬くなります。しこりを感じないため、正常な乳腺と形成しないため、正常な乳腺と

境界が不明瞭で、急速に増大することよくあります。そのメカニズムは、後ろ脚の皮膚リンパ管やリンパ節に乳腺のがん細胞が入り込み、リンパ液の停滞が起きます。それにより、脚のむくみ(片方の場合も両方の場合もあり)や、大腿部の筋肉の硬直や腫れ方の差による左右の筋肉の太さの違い、脚の歩行異常、起立困難にまで至る場合

た症例の30%では「播種性血管内凝固」という病状になり、出血時に血が止まりにくくなり、重く症状の疾患であり、臨床症状と皮膚のパンチ生検(パイオプシー)の病理検査の結果に基づいて最終診断となります。

このように怖い病気でありながら、治療に関する報告はほとんどありません。他の乳腺腫瘍のような外科手術は決まらずに行ってはなりません。化学療法(抗がん剤の使用)に関する報告もほとんどありません。よって、私たち獣医師がしてあげ

治療困難 脚に異常も

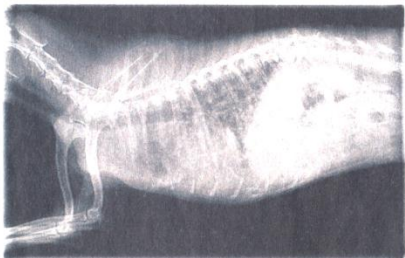
もあります。

肺に転移も

このように、がん細胞が周りの組織に広がる「局所浸潤」も激しいのですが、遠隔転移もあり、診断時に既に肺の組織内で乳腺のがん細胞が増殖していることも珍しくはありません。ま



炎症性乳がんでは右の後ろ脚が腫れた犬。左脚には症状が見られない



乳腺のがん細胞が転移した肺のレントゲン画像